# 横地高畑遺跡発掘調査報告

－松阪市横地町所在－

1998 年 3 月

三重県埋蔵文化財センター

# 序

松阪市は、伊勢平野の中南部に位置しており、櫛田川の下流域に開けた場所です。とくに漕代地区は櫛田川の右岸に広がる、自然堤防上に集落が形成された場所です。古くから河川の流れとともに人びとの生活様式も移り変わってまいりました。なかでも横地町周辺は水害の影響を幾度も受けており、居住域を限られてきました。

今回報告いたします横地高畑遺跡周辺は、現在まで残る微高地のうちのひとつで、古代人の生活の跡がのこる場所と考えられてきました。調査は、このうち県営ほ場整備事業に伴い滅失する部分について緊急発掘したものです。

漕代地区は平成６年度から連続して発掘調査が実施され、そのたびごとに貴重な遺構遺物が見つかっており、地域住民の埋蔵文化財に対する関心も高まってまいりました。私たちは、こういった貴重な遺物をもとに郷土の歴史を再現していくことが肝要かと思われます。今回の報告が今後の文化財保護と研究の進展に役立つことを願って止みません。

平成１０年３月

三重県埋蔵文化財センター
所　長　奥　村　敏　夫

# 例　　言

1　本書は、三重県松阪市横地町字高畑に所在する横地高畑遺跡の発掘調査結果をまとめたものである。

2　本調査は、三重県教育委員会が三重県農林水産部より執行委任を受けて、平成９年度県営ほ場整備事業に伴って実施し、調査費用は、その一部を国庫補助金を受け三重県教育委員会が、他を三重県農林水産部と地元市町村が負担した。

3　調査の体制は以下のとおりである。

| | |
|---|---|
| 調　査　主　体 | 三重県教育委員会 |
| 調　査　担　当 | 三重県埋蔵文化財センター　調査第一課 |
| | 主事　　中川　明 |
| | 研修員　津田琢麻 |
| 調　査　期　間 | 平成９年５月６日～平成９年９月９日 |

4　調査にあたっては、三重県農林水産部農地整備課、松阪農林事務所、松阪市教育委員会、および地元の方々に協力をいただきました。記して謝意を表します。

5　発掘調査後の遺物整理は、上記担当者のほか、管理指導課職員が補助した。

6　本書の執筆は中川、津田が行い、文責は各文末に記した。編集は、中川が担当した。

7　本書で示す方位はすべて真北を用いた。なお、磁北は６°20′西偏（平成４年６月）している。

8　本文で用いた遺構表示略記号は、下記の通りである。

ＳＸ：墓　　ＳＢ：掘立柱建物　　ＳＤ：自然流路、溝　　ＳＡ：柱列、柵
ＳＨ：竪穴住居　　ＳＥ：井戸　　ＳＫ：土坑　　Pit　：柱穴、小穴

9　本書で報告した記録及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

10　写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応させてある。

11　スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

# 本　文　目　次

Ⅰ　前　　言 …… (1)
調査の契機・経過・方法
調査日誌抄
文化財保護法に関する諸届け
Ⅱ．位置と歴史的環境 …… (2)
Ⅲ．基本的層序と遺構 …… (4)
Ⅳ．遺物 …… (11)
Ⅴ．結語 …… (13)

# 挿　図　目　次

第1図　遺跡位置図 …… (3)
第2図　調査区位置図 …… (4)
第3図　A・B地区遺構平面図 …… (6)
第4図　A・B地区土層断面図 …… (7)
第5図　SX13平面図・断面図 …… (8)
第6図　SH19・SK21実測図 …… (9)
第7図　SB61平面図・断面図 …… (9)
第8図　SE33平面図 …… (10)
第9図　SD17遺物出土状況図 …… (10)
第10図　出土遺物実測図（1） …… (14)
第11図　出土遺物実測図（2） …… (15)

# 表　目　次

第1表　出土遺物観察表 …… (16)

# 図　版　目　次

PL　1　A地区全景　（西から）
SX13　（西から）
SH19　（西から）
SE33（断割り）（西から）
PL　2　出土遺物

# Ⅰ　前　　言

## 1　調査の契機

横地高畑遺跡は、三重県松阪市横地町字高畑に所在する周知の遺跡である。当遺跡周辺は、現況は松阪市南東部の水田地帯で、自然堤防がその隙間に形成され、櫛田川に沿うように点在する。

平成９年度の県営ほ場整備事業で、遺跡が壊される恐れがあったので、平成９年の２月に試掘調査を行った結果、小穴や古墳時代の遺物、中世の遺物を確認した。これを受けて、松阪農林事務所と遺跡保存の協議を重ねた結果、工事対応が不可能な部分について本調査を実施することになった。

調査は、遺跡面積約3,150㎡のうち事業により削平を受ける1,700㎡について行った。掘削が遺構面に達しない箇所については工事対応とした。調査期間は平成９年５月６日～９月９日の63日間である。

## 2．調査の経過

調査は、事業により掘削される２か所Ａ・Ｂ（第２図）地区について行った。両区ともに耕作土を重機で、包含層以下を人力により掘削していった。

調査に参加していただいたのは、稲木町、目田町、横地町に在住の方々である。記して感謝いたします。

西田昌之、阪井邦好、柴田利一、岩田修、奥田松代、楠木和江、橘とみ、永崎幸美、中西美奈子、中村せい子、中村みちよ、脇田サツ、田所きぬ子、中井捻子、前田きみ子、青木キヨ、久保田ハナ、西田ミサエ、脇田房子（登録順）

〔調査日誌抄〕

５月６日　重機による表土掘削。

５月７日　地区杭設定。調査事務所設営。

５月９日　表土掘削終了。

５月12日　包含層掘削開始。

５月13日　調査区東端にトレンチ１を設定。古墳時代の砂礫層から甕、高杯出土。

５月16日　重機による表土掘削（東端部分）

５月20日　７列グリッドまで掘削終了。ピット多数検出。中世の山茶椀、鍋片出土。

５月23日　レベル移動。トレンチ２、３を設定。

５月26日　トレンチ内の土層断面で遺構面を確認近現代の攪乱が基盤層まで及ぶことが明らか。

５月27日　周溝（この時点では単なる溝と理解）埋土から土師器高杯出土。

５月28日　中世の溝から南伊勢系鍋出土。出土状況図面作成。

６月２日　奈良時代の竪穴住居検出。土坑検出。清掃。遺物細片取り上げ。本日より水汲み上げ当番開始。

６月10日　竪穴住居のセクション設定。土層確認

６月17日　周溝の検出続行。不明瞭なラインに随時トレンチを設定、掘削。

６月18日　遺構平面図（調査区中央まで）作成準備。紙配り図作成。

６月19日　台風接近のため台風対策。

６月27日　中世の溝検出。

７月３日　遺構平面図作成の日程を計画。応援依頼。

７月４日　周溝検出続行。南半のピット検出及び掘り下げ。

７月８日　簡易水槽設営。８列グリッド検出。

７月14日　10列グリッド掘削。遺構検出。石組み井戸確認。平面図作成。

７月16日　井戸周囲にピット確認。

７月18日　ベタ打ち作業開始。

７月22日　ベタ打ち作業続行。

７月23日　11～15列グリッドを重機掘削。

７月24日　井戸掘り下げ続行。古墳時代の溝検出。

７月31日　13～14列グリッドで土坑集中。

８月６日　遺構平面図作成開始。

８月７日　井戸平面図終了。弥生後期？の溝掘削。

８月18日　14～15列グリッド検出。

８月19日　リベット打ち作業終了（Ｂ地区を含む）

８月21日　Ｂ区土層断面図作成開始。増員４名。

８月25日　ローリングタワー設営。Ａ区主要遺構写真撮影。作業用具片付け。作業員終了。

９月９日　遺構平面図作成完了。調査終了。

## 3．調査の方法

（1）地区設定・掘削方法について

調査区は、事業計画の農業用道路で分断される区画を便宜的にA・B・C地区と呼称した。A地区は、4×4mグリッドの小地区を設定し、東から西に1～16を北から南にアルファベットのA～Nの番号を与えた。掘削は、表土を重機で、包含層以下を人力で行った。B地区は3×3mグリッドを設定した。

（2）遺構図面について

A・B地区全体の遺構平面図は、予め準備した紙配り図に従い縮尺1／20で作成した。また土層断面図、及び個別の主要遺構図面についても同縮尺を用いて行った。

（3）記録写真について

A・B地区ともに遺構の全体写真をローリングタワー上から中判カメラ（ペンタックス67）を使用し、撮影した。主要遺構についても同器材および35㎜カメラ（ニコンFG）で撮影した。室内では遺物写真撮影を行った。なお調査期間中、および遺物整理時に使用したフィルムは、ブローニー（フジネオパンSS／PROVIA 100）および、35ミリ（ネオパンSS／SensiaII）である。

4．文化財保護法に関する諸通知

文化財保護法（以下、法）等にかかる諸通知は、以下により文化庁長官あてに行っている。

・法第57条の3第1項（文化庁長官あて）
　平成9年6月30日付教文第78-3号（県知事通知）
・法第98条の2第1項（文化庁長官あて）
　平成9年5月7日付教文第 297号（県教育長通知）
・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（松阪警察署長あて）
　平成10年1月16日付教文第6-88号（県教育長通知）

# Ⅱ．位置と歴史的環境

横地高畑遺跡（1）は、行政区画上は三重県松阪市横地町字高畑に所在する、周知の遺跡である。

松阪市南部を伊勢湾に向けてほぼ東に流れる櫛田川は、祓川と分かれるあたりから広く南北に沖積平野を形成しており、かつて本流であったと考えられる祓川とともに、乱流を繰り返していたと思われる。

この地域では自然堤防が発達しており、現在の法田町から横地町、目田町を経て稲木町にいたる集落などが存在している。当遺跡も地形的には同様で名残が随所に観察できる。

当地域は、平安時代には東寺領大国庄の領域に属し、「横道」と呼称された。11世紀後半には、当地が、神郡内に属していたため、神官との抗争も頻繁であったという。中世になると、嘉暦三年には「横知」の名がみられ、伊勢神宮の支配下に入っていく。また天文年間になって初めて「横地村」の名称が使用される。近世は、津藩と鳥羽藩領の入組地となり、現在に至っている[①]。

櫛田川と祓川周辺には古墳時代から中世にかけての注目すべき遺跡が集中する。弥生時代以前の歴史的概観については、他の報告書[②]に譲るとして、それ以降を時代順に概述する。

祓川右岸では、古墳時代後期、南東部の低地から丘陵部に神前山古墳群（2）、大塚古墳群（3）、高塚古墳群（4）、コドノ古墳（5）が築造された。さらに大塚古墳群の西側の丘陵斜面にある、400基以上の横穴式石室を有す河田古墳群（6）の存在が特筆される。

一方、古代から中世にかけての遺跡は、今のところ櫛田川右岸に集中している。古川遺跡（7）は、石組み井戸4基などが検出され、硯や墨書土器などが出土しており、鎌倉時代を中心とする集落跡と考えられる[③]。中の坊遺跡（8）では、石組みの暗渠や石組みの井戸などが検出され、室町時代の土師器皿・鍋が多量に出土した。下層から50個体以上の高杯など古墳時代の遺物も多量に出土し、祭祀が行われていた可能性もある[④]。また、周辺地域に分布する古轡通りA（9）・B遺跡（10）、萱原通り遺跡（11）、崩れ通りA（12）・B遺跡（13）、大正寺遺跡（14）、目田山遺跡（15）、西ノ垣内遺跡（16）からは土師器甕や山茶椀などの日用雑器なども採集されている。櫛田川左岸の山添遺跡（17）では、掘立柱建物跡とこれに関連する、石組み井戸も確認されている[⑤]。また、隣接する神山には標高131mの神山城跡（18）があり、北畠氏の配下、潮田氏の居城があったと伝えられている。櫛田川右岸にも、これに相対するよう

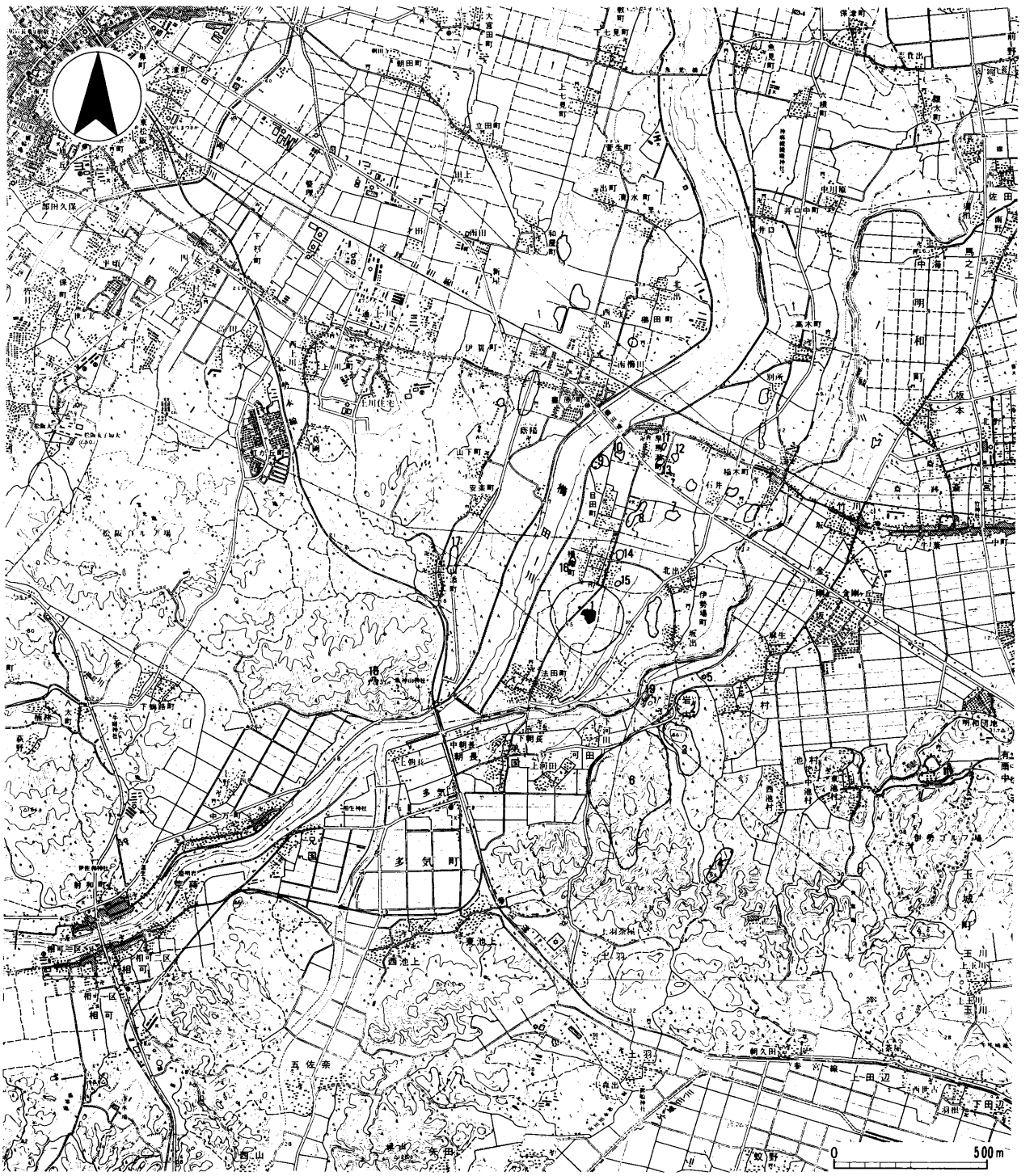
に岩内城（19）が築かれている。[6]

なお、近世のまとまった遺跡は、当地域では現在のところ確認されていない。

（津田琢麻）

［註］

1 「三重県の地名」『日本歴史体系24』平凡社　1983年
2 田村陽一他『一般国道４２号松阪・多気バイパス建設地内発掘調査』
明気窯跡群・大日山古墳群・甘粕遺跡・巣護遺跡　など　三重県埋蔵文化財センター　1995年
3 伊藤裕之『古川遺跡・山口遺跡発掘調査報告』　三重県埋蔵文化財センター　1996年
4 伊藤裕之『中の坊遺跡発掘調査報告』　三重県埋蔵文化財センター　1997年
5 新田洋『山添遺跡発掘調査報告』　三重県教育委員会　1979年
6 『三重の中世城館』　三重県教育委員会　昭和52年




**第１図　遺跡位置図（1：50,000）［国土地理院「松阪・国束山」（１：25,000）から］**

# Ⅲ. 基本的層序と遺構

## 1．層序

本調査区は、櫛田川下流の自然堤防上に位置し、現況は、標高約13～12mの畑地である。若干の南方に広がる緩斜面となっている。

Ａ地区の基盤は、分厚い砂礫層の上に堆積した黄褐色砂質土で、この土層も流水作用で調査区の南端と北端では状況が異なる。部分的に観てみると、東端では基盤層の上面に堆積する中世の茶褐色土層がある。ここでも基盤層は南に向かって薄くなっている。また全体的に中世以降の堆積層は明瞭でなく、現在の表土（灰褐色土層）が基盤層にまで及んでいたり、暗褐色土層が部分的に混入したりする。また、近現代の削平が深くまで及んでいたり、比較的浅かったりと、遺構検出面も不均一であった。

以下、基本的な層序を記述する。

第１層：灰褐色土

第２層：にぶい橙色土、茶褐色土（東端部分）

第３層：黄褐色土

第４層：暗褐色土

第５層：砂礫土

第２図　調査区位置図（１：2,000）［■ 試掘坑］

## 2．遺構

今回の調査では、弥生時代後期から室町時代末期までの遺構を確認した。後世の攪乱が埋土にまで及ぶものが多数あり、時期決定に欠くものが調査区東半部に集中した。以下遺構別に概述する。

（1）弥生時代～古墳時代の遺構

遺構の殆どを調査区の北半部分で確認した。後世の攪乱で削平されているものが殆どであった。

**ＳＤ44**　調査区北側、Ｂ～Ｄ区、11～14グリッドで確認した。長さ20m、幅 1.2mで西流する溝である。埋土は、暗黄褐色土で西側の遺構底部から弥生土器壺や土製品、さらに端部では、古墳時代の甕が集中して出土している。これらは時期を置かずに埋没したと考える。

**ＳＸ13**　Ｃ～Ｇ区、５～11グリッドで検出した。東西・南北の各一辺が約９mの方墳である。墳丘は、基盤層を一部削り出していると思われるが、攪乱がかなり及んでいるため全体形は不明である。周溝は南西側部でやや楕円形を呈している。深さは約 0.7mである。断面形は、南東角でややくびれる形である。溝の底部から土師器高杯、鉄鎌等が出土している。近接の溝出土の耳環、須恵器は当遺構関連の遺物であると考えられる。（第５図）

**ＳＤ12**　調査区東方のＤ区４～Ｊ区９グリッドに至る溝である。幅約0.8m、深さは約60cmである。埋土はＳＸ13同様の淡黄褐色土の単一層である。埋土から土師器甕、須恵器杯身が出土している。古墳時代後期の遺構であると考えられる。

**ＳＤ27**　調査区東のＡ区５グリッドで検出した。幅約1.4m、深さは約70cmである。遺構端部が北にカーブし、遺構全体が調査区外へ及んでいるため全体の規模は不明である。底部から土師器壺が出土している。古墳時代後期の遺構である。

**ＳＤ40**　Ｆ～Ｈ区13～15グリッドで検出した。最深で50cmである。後世の削平が深くにまで及んでおり、遺物は小片であった。全体形からは周溝とも考えられるが詳細は不明である。前述のＳＸ13と比較すると若干小さく、径７～８mの不定型な楕円形を呈する。当報告では、溝としておく。

**ＳＤ65**　Ｉ～Ｋ区11～12グリッドで検出した。最深で30cmの溝である。ＳＤ40と同様、削平が激しい。すぐ西側の包含層で古墳時代初頭の須恵器が出土しているのみで本遺構埋土からの出土はない。ＳＤ40同様、全体形からは周溝とも想定されるが、本報告では、溝としておく。

（2）奈良時代～平安時代の遺構

**ＳＨ19**　Ｂ・Ｃ区４，５グリッドで検出した。東西約３m、南北2.6mで深さ20cmのやや台形状の竪穴住居である。暗褐色土層からは、北東隅で炭化物に混じって土師器甕片が集中して出土した。また南東の壁面に接するかたちで廃棄ピットを確認している。埋土から土師器皿等が出土している。（第６図）

**ＳＫ14**　Ｃ区７グリッドで検出した。ＳＸ13の北東角で重複している。長径約 1.8m、短径約 1.4mで深さ約70cmの土坑である。中心部で焼土を確認した。出土した土師器杯類はほぼ同時期であることから短期間に埋没したと考えられる。平安時代初頭の遺構である。

**ＳＫ20**　ＳＨ19の西で確認した楕円形の土坑である。長径1.4m、短径１mで深さ25cmの土坑である。土師器が細片であるため確定はしがたいが、ＳＫ14と同時期の遺構であろう。

**ＳＫ25**　ＳＤ27の北、Ａ区７グリッドで検出した。長径約 1.2m、短径0.8mで深さ30cmの土坑である。平安時代後期の遺構である。

**ＳＫ26**　ＳＫ25と同じＡ区７グリッドで検出した。径約0.8m、深さ約30cmである。遺構半分は調査区外に出るため全体の規模は不明である。埋土の状況は25と同様である。25と同時期の遺構である。

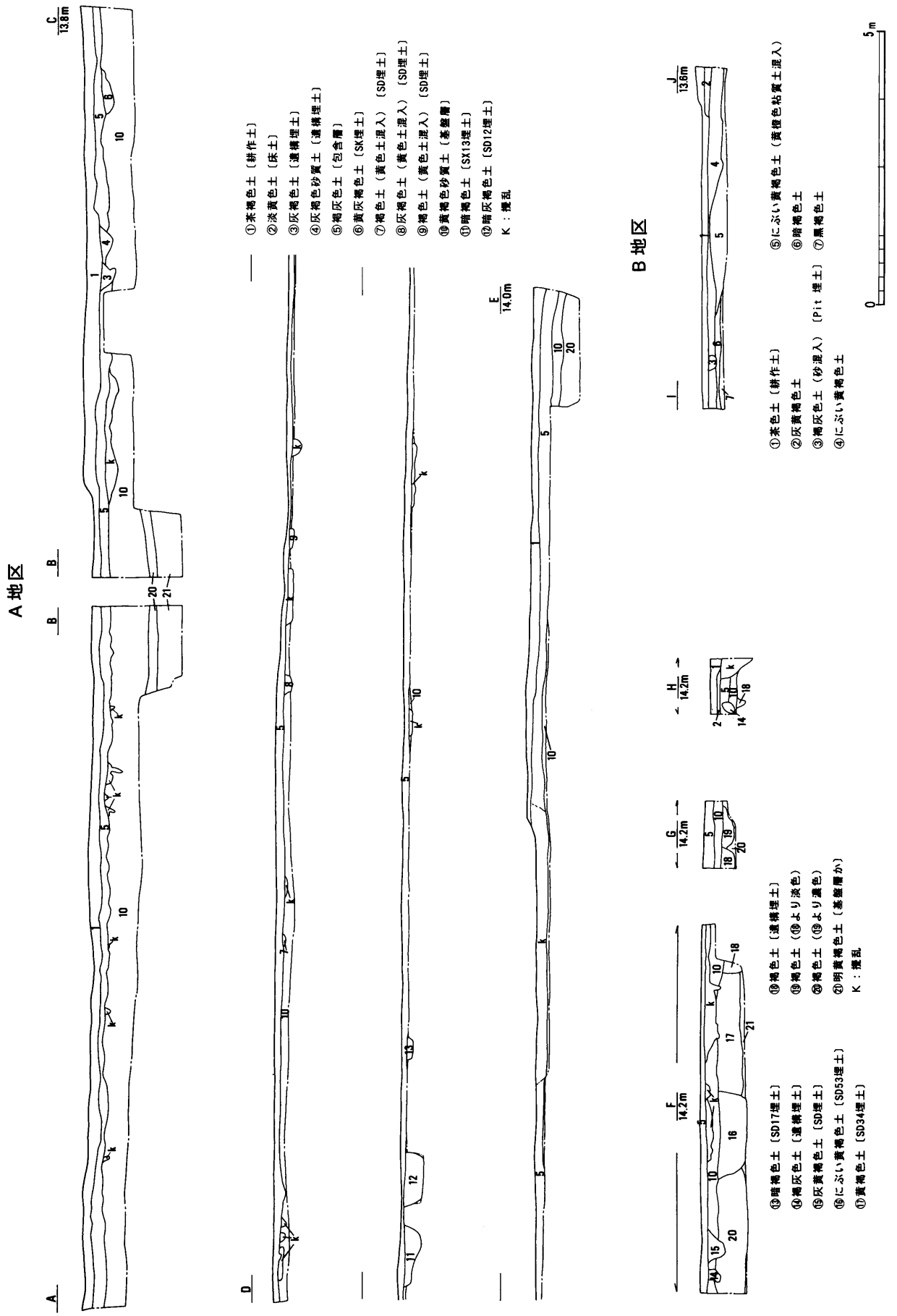
**ＳＫ30**　東西２mで、南北が0.8mを越える土坑である。非常に浅いのが特徴で、底部では粘土が均一に検出された。土師器甕、杯が出土しており、斎宮編年[7]の８世紀初頭の遺構であると考えられる。

**ＳＫ49**　Ｄ区14グリッドで検出した。長径１m、短径0.8mで深さ約30cmの土坑である。炭化物が多く含まれていた。ＳＫ30同様、８世紀初頭の遺構である。

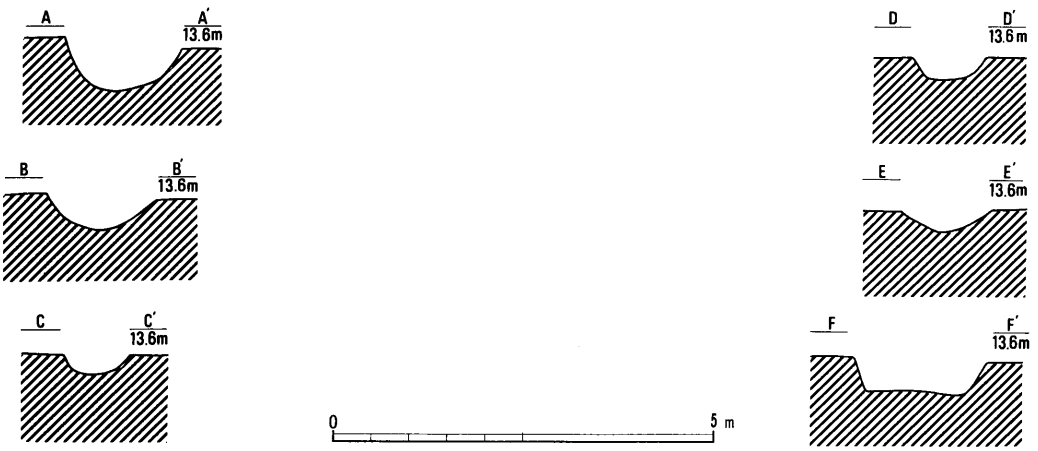
（3）鎌倉時代～室町時代の遺構

当時代の遺構は調査区東半部分に集中する。遺構は溝が主であるが、井戸も１基確認した。石組みの井戸は構造的にはこの地域で注目されるものである。以下順に記述する。

第３図　Ａ・Ｂ地区遺構平面図（1：300）




第4図　A・B地区土層断面図（1：100）




第５図　ＳＸ13平面図・断面図（１：100）

**ＳＢ61**　東西４間、南北２間の建物である。柱間は、桁行、梁行ともに約 1.8mの等間である。Pit から少量の鎌倉時代後葉とみられる土師器鍋片が出土した。（第７図）

**ＳＢ62**　東西、南北ともに２間等間の建物である。柱間は、桁行、梁行ともに約2.4mである。ＳＢ61と同時期の建物である。

**ＳＡ63**　南北に８間分を確認した。柱間 2.1mの等間の遺構である。遺物は小片で不明であるが、上記建物の Pit の形状やその埋土の状況から同時期の遺構であるとみられる。

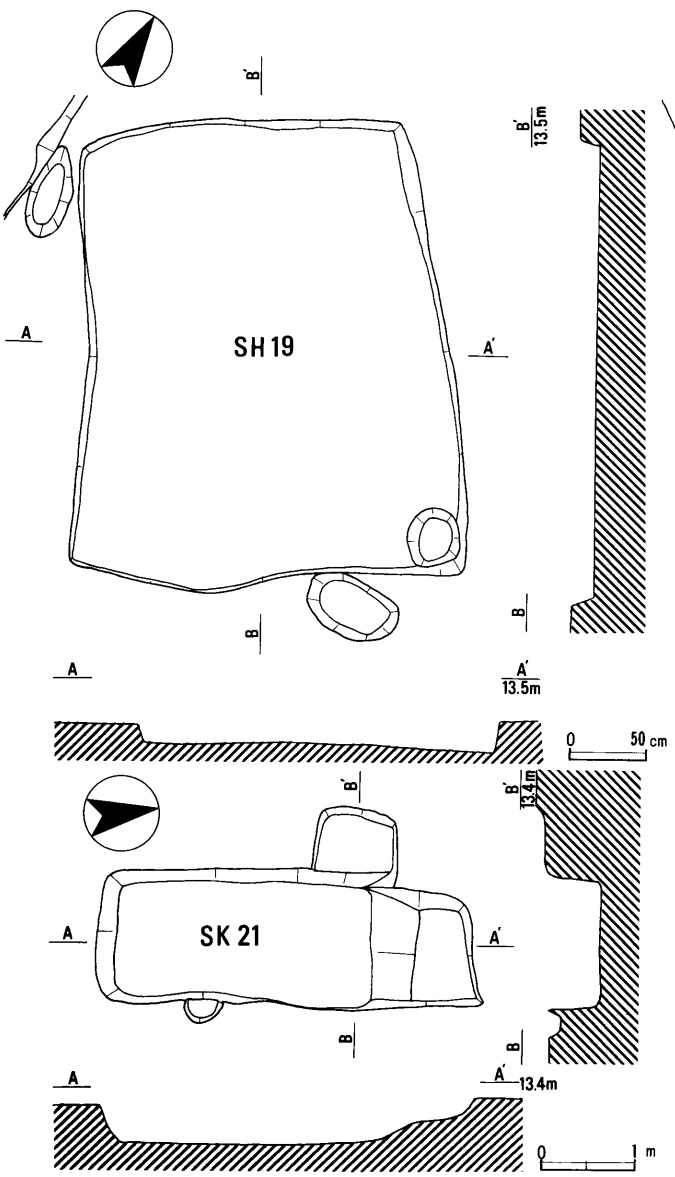
**ＳＡ64**　ＳＡ63の西側で確認した。南北に８間分の遺構である。2°西に振れる。

**ＳＡ66**　ＳＡ64のさらに西側で７間分を確認した。ＳＡ63と同方向の遺構である。

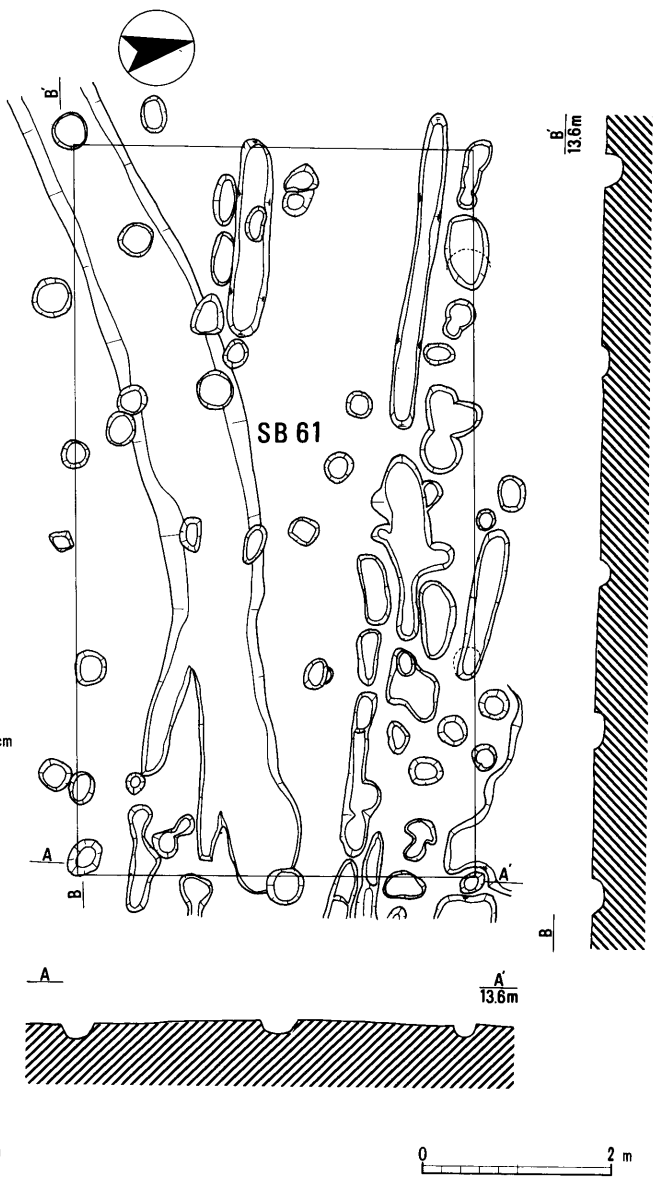
**ＳＤ４**　Ｅ・Ｆ区２・３グリッドで検出した。遺構上面の広い範囲で整地土が覆い、遺構埋土に後世の混入が見られた。長さ10m、幅40cmで西方向に延びる溝である。小片で詳細は不明であるが、藤澤編年Ⅲ－６型式に相当する[8]。

**ＳＤ５**　Ｆ区３グリッドで検出した。長さ５ｍ、幅40cmでＳＤ４と同様、西に延びる。時期的には藤澤編年Ⅲ－５型式に相当する。

**ＳＤ８**　Ｆ区４グリッドで検出した。礫の混入した




第６図　ＳＨ19・ＳＫ21実測図（上１：50，下１：80）




第７図　ＳＢ61平面図・断面図（１：80）

長さ４ｍ、幅 1.1ｍで、深さ20cmの溝である。古墳時代の須恵器もみられたが、前述のＳＤ４、５の埋土と比較しても同時期の遺構と考えられる。南伊勢系の土師器鍋が出土しており、第４段階の範疇であろう[8]。

**ＳＫ37**　調査区北壁、Ｂ区11グリッドで検出した。長径0.8ｍ、短径0.6ｍで深さ約30cmの土坑である。出土した山茶椀から藤澤編年Ⅲ－５型式の時期に比定される。

**ＳＫ21**　Ｂ・Ｃ区５グリッドで検出した。長径４ｍ短径1.2ｍで、深さ80cmの土坑である。埋土は２層に分かれ、下の茶褐色土の埋土底部から羽釜、土師器皿が出土している。遺物の出土状況が雑然としていることから廃棄土坑と考える。時期的には南伊勢系鍋の第４段階に比定される。(第６図)

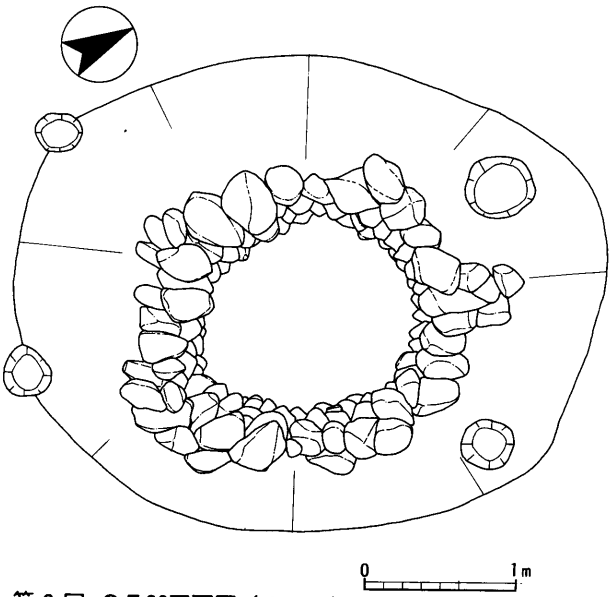
**ＳＫ50**　Ｄ区12グリッドで検出した。長径 1.5ｍ、短径1.3ｍで深さ30cmの土坑である。ＳＤ44に重複する。藤澤編年のⅢ－５型式に相当する時期である。

**ＳＫ36**　Ｂ・Ｃ区11グリッドで検出した。長径 1.6ｍ、短径 0.8ｍで深さ30cmの土坑である。暗茶褐色の埋土から山茶椀が出土しており、雑然とした状況から廃棄土坑とみられる。藤澤編年Ⅲ－６型式の時期に比定される。

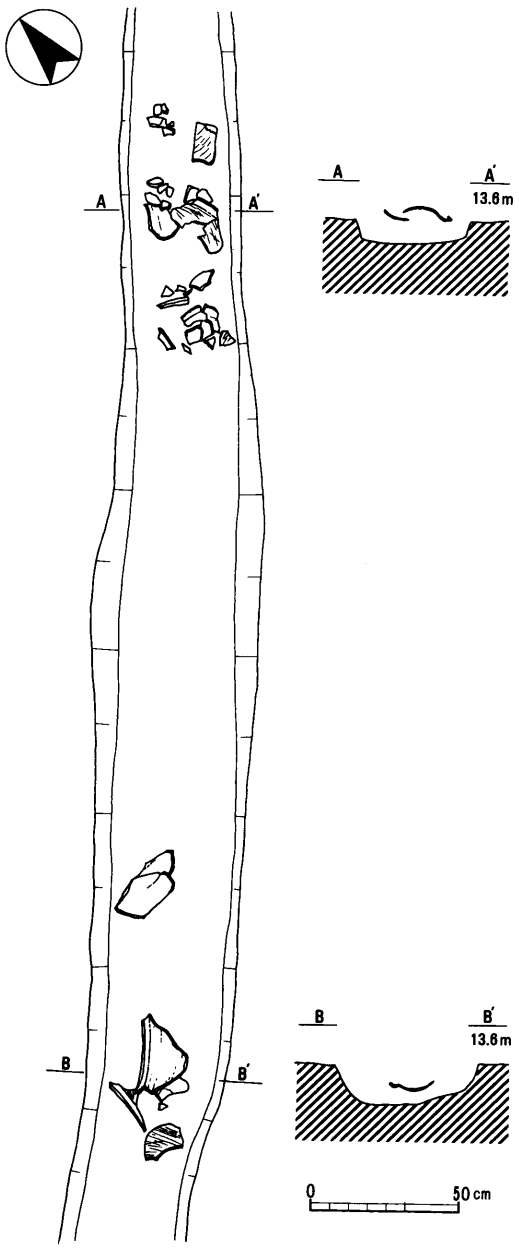
**ＳＫ57**　Ｃ区15グリッドで検出した。長径4.2ｍ、短径2.0ｍの長方形の土坑である。遺構全体が攪乱を受け、かなり削平されていた。遺物も少量ながら、土師器甕、山皿が出土している。時期的には藤澤編年Ⅲ－７型式の時期に相当する。

**ＳＤ17**　Ｆ区５～Ｉ区７グリッドで検出した。長さ15ｍ、幅0.5ｍ、深さ20cmで南西に流れる溝である。14世紀末から15世紀初頭にかけての南伊勢系鍋が出土している。(第９図)

**ＳＥ33**　Ｈ区10グリッドで検出した。内径約1.4ｍ、深さ3.3ｍの石組み井戸である。掘形は径3.3ｍほどで、底部ほど裾細りする。井戸埋土は砂質系でほぼ短期間で埋没している。積み石は、砂岩系の石材が殆どで、底部付近では、最大径が45cmに及ぶものがあった。断面図は、崩落の危険性があり、作成を中止し、写真に記録した。井戸の中央部から室町時代初頭の遺物が出土している。山添遺跡[10]、中の坊遺跡、古川遺跡でも同形状の井戸が確認されている。(第８図)




第８図　ＳＥ33平面図（１：50）




第９図　ＳＤ17遺物出土状況図（１：25）

# Ⅳ. 遺　物

今回報告する出土遺物は、すべてＡ地区から出土した遺物である。コンテナバットで75箱を数える。土師器が圧倒的に多く、須恵器や鉄製品は微量である。時期的には弥生時代後期から室町時代にかけてである。Ｂ地区の遺物については、微量かつ小片であったので割愛する。

遺構出土の遺物から順に記述する。

## 1．ＳＸ13、ＳＤ44、ＳＫ35出土遺物

**土師器壺**　（１）は、口縁部のみ残存する。口縁端部が外反する、外面に横方向のヘラミガキを施す。ＳＸ13の周溝から出土した。他にもう１点小片が出土している。（２）は口縁部が欠損している。頸部外面にヘラミガキ後のナデ調整が施されている。ＳＫ35から出土した。（３）は平底形態の壺で、体部外面にタテ方向のヘラミガキを施す。孔が２か所に穿たれている。ＳＤ44から出土した。（４）（５）は底部である。（４）は平底である。内面に斜方向のハケメが施される。ＳＤ44から出土した。（５）の外面は磨滅が激しい。内面の体下半部に斜方向のハケメが施されている。

**土師器甕**　（６）から（13）はＳ字状口縁台付甕である。（６）の口縁端部は外反し、肩部は張る。（７）は（６）に比較すると受口部の屈曲は弱まり、口縁全体がより外反する。ともにタテ方向のハケメが施されている。（８・９）も同様である。（９）は口唇部が横に広がり、面をもつようになる。(10) は（９）と比較すると口唇部が斜めにやや下がる。(11～13) は脚部である。(11) の斜行ハケメは下部まで及んでいる。(13) は (11) に比較すると上部で止まっている。折返しは若干にぶくなる。すべてＳＤ44から出土した。欠山式～山城式期に相当する[11]。

**土師器高杯**　(14) はＳＸ13の周溝底部から出土した。杯部、脚部ともにヨコナデで調整されている完形品である。

**土製品**　(15) は上部ほど厚くなる、板状の土製品である。表裏面に朱が付着する。形から獣、櫛とも考えられるが不明である。ＳＤ44で上記の甕と共に出土した。

**鉄鎌**　(16) はＳＸ13の周溝内の内法側面で出土した。大きさは、長さ14cm、幅３cm、厚さ 1.5mmである。

## 2．ＳＤ12出土遺物

**須恵器瓶**　(17) は外面頸部、および体部に波状文が施されている。体中央部から底部にかけてヘラケズリ後のヨコナデ調整が成されている。時期的にはＴＫ 208併行であるとみられる[12]。

他に注口下に波状文が施されているものが２点出土している。

**耳環**　(18) は、外径 1.9cm、太さ 1.6mmで金銅製である。外面が面取りにより調整され、６面を有している。ＳＸ13からの混入品と考えられる遺物である。

## 3．ＳＨ19出土遺物

**土師器甕**　(19) は、内外ともにハケメ調整が施される。口径が26.5cmで、当遺跡内では大型である。(19) の口縁端部は、ほぼ真上に摘み上げられているのに対し、(20) は外反するのみで摘み上げはない。口頸部は (19)・(20) ともにやや肥厚する。

**土錘**　(21～24) はすべて土師質の小型の土錘である。外面を比較的丁寧にナデている。

**須恵器杯蓋**　(25) の外面は、ロクロケズリが施され、下半部のみナデている。折返しはほぼ真下に摘み出している。

## 4．ＳＫ14出土遺物

**土師器甕**　(26) の頸部は、体上部からほぼ垂直に立ち上がり、口縁にかけて屈曲する。口頸部は、肥厚しない。内面は、全面にナデが施されている。

**土師器杯**　(27～29) は底部から口縁に向かって立ち上がるところから外反する。屈曲部に稜をもつ。底部外面はオサエ後ナデている。(27) (29) は (28) に比較し、偏平である。

**灰釉陶器椀**　(30) は、内外面に灰釉がハケ塗りさ

れている。10世紀初頭のものと思われる[13]。

## 5．ＳＤ34出土遺物

**土師器杯**　(31～35) は杯Ｂ類である。(31) (32) はやや偏平で底部から口縁部への屈曲が緩く、外反気味の端部は丸みを帯びる。(33～35) は屈曲部の立ち上がりの角度は急で、垂直方向に近い。外面は (32) を除いて底部にオサエナデが施されている。(35) の口縁端部はヨコナデによって垂直方向に摘み上げられている。

**土師器甕**　(38) は口径42cmの大型品である。体上部から口縁にかけてやや膨らみ気味に外反する。外面は縦方向のハケメが施される。内面は、斜め方向のケズリ後に横方向のハケメ調整が施される。

**須恵器甕**　(39) の口縁は沈線が２条施される。体上部はカキメ調整が施された後にタタキメ調整が施されている。内面は、頸部以下にタタキメ調整が施されている。

## 6．ＳＥ33出土遺物

**土師器鍋**　(40) の口縁端部は偏平で折り返されている。頸部内面は稜をもたない。体部外面のオサエ調整は施されない。南伊勢系鍋の第３－ｂ形式の範疇に相当する。(41) は口縁端部が水平気味に内傾する。体部外面は、クシメ状の斜方向の粗いハケメが下部1／3まで施される。第４－ａ形式の範疇に相当する。

**羽釜**　(42) は小片である。口縁端部の折り返しが外方向である。ＳＫ21出土の (45) と同形状であり、時期的には第４－ａ乃至は４－ｂ形式の範疇であろう。

**土錘**　(43) は残存する長さ 4.3cm、幅 1.6cmの遺物である。他に比較すると胎土は密で丁寧に作られている。

**山茶椀**　(44) は底部の残存片である。口縁部も欠損しているため断定はできないが、藤澤編年Ⅲ－５型式前後であろう。

## 7．ＳＫ21出土遺物

**土師器皿**　(45) は、皿類としては当遺跡の典型的な形状を示す。Ｂ系統の範疇に相当する[14]。埋土からは本品のみ出土した。

**羽釜**　(46) は (42) と同形状、同時期の遺物である。

## 8．ＳＤ17出土遺物

**土師器鍋**　(47・48) は南伊勢系鍋である。(47) の口縁はヨコナデされ、折返しが付く。体部外面はクシメ状の斜行ハケメが施される。第３段階ｂ形式の範疇である。(48) の口縁は摘み上げられ、内向する。外面は、体上部から横方向のハケメが、さらに底部にヘラケズリが施される。第４段階のａ、ｂ形式の範疇である。

## 9．Pit 出土遺物

**須恵器甕**　(49) は焼成不十分な甕である。土師器的な質感を残す遺物である。口縁端部は、ロクロナデ調整され、垂下する。頸部中央の外面に縦方向のハケメが、体部にタタキメが施されている。内面は横方向のハケメが施されている。

**須恵器瑤**　(50) は体中央部外面に工具による斜方向の刺突文が施される。その直下にタタキ後、カキメが施されている。底部外面に孔が１か所穿たれている。

**提瓶**　(51) の体部中央以下は欠損している。体部右半分の外面は右方向のロクロケズリで調整されている。

**須恵器杯蓋**　(52) は頂部に宝珠ツマミがつく。外面はロクロナデ調整され、口縁端部の折り返しは緩い。(53) は口径７cmの蓋である。折り返しはほぼ垂下する。

**須恵器杯身**　(54) は屈曲部から口縁への立ち上がり角度は急で、ほぼ垂直である。器厚は薄く、端部は僅かに丸みを帯びる。

**土師器甕**　(55) は体上部に１対の把手がつく。頸部から口縁にかけてやや膨らむ。口縁端部は摘み上げられてやや稜をもつ。体部外面に縦方向のハケメが施される。(56)・(57) はともに外形は球状を呈する。把手はつかない。口縁端部は摘み上げられて、外側に面をもつ。下部の横方向のハケメ以外はともに同じ調整方法である。

**土師器杯**　(58) は他と比較して丸みがある。口縁

は、外反ぎみに屈曲し、端部は丸みを帯びる。底部外面に刻みが施されている。

**土師器皿**　(59) は器高 1.2cmの皿である。南伊勢系土師器のA系統に属する。

## 10. 包含層出土遺物

**器台**　(60) は脚部である。底径20cmで、2等辺3角形の透しが最下帯部の上から開けられている。

**土師器杯**　(61) と同形状である。体下半部はヘラケズリが施されている。底部外面に墨書が観察できる。「几」(かぜがまえ) を使用した文字にも理解できる。(62) は屈曲部から見込にかけてやや器厚が膨らみをもつ。口縁の外面に波状の墨書が観察される。

**土師器高杯**　(63) の杯部外形は丸みを帯びて立ち上がる。口縁端部は外方に摘み上げられて内側に面をもつ。外面に斜行ハケメが施される。脚部は欠損している。

**土師器皿**　(64) は下半部外面に横方向のヘラケズリが施されている。内面には、口縁部に縦方向の直線状暗文と底部に螺旋状の暗文が刻まれている。

# V. 結　語

**古墳の立地について**

これまで横地高畑遺跡は、中世の集落跡と性格づけられていたが、今回の調査により室町時代以前の姿がより明らかになった。例えば、特に古墳時代に限定すると、沖積平野の微高地にあたる当遺跡に方形の墳丘が確認されたことである。これに対し、周辺に築造された群集墳、例えば近隣の神前山古墳群、大塚古墳群、さらに河田古墳群等は丘陵の頂部から斜面に位置し、高位に分布している。

今回の調査は、祓川や櫛田川のより下流域まで、地域単位の墳丘が築造されてきたことを示す資料となりえた。今後さらに河口部域まで視野を広げた古墳群の調査に期待したい。

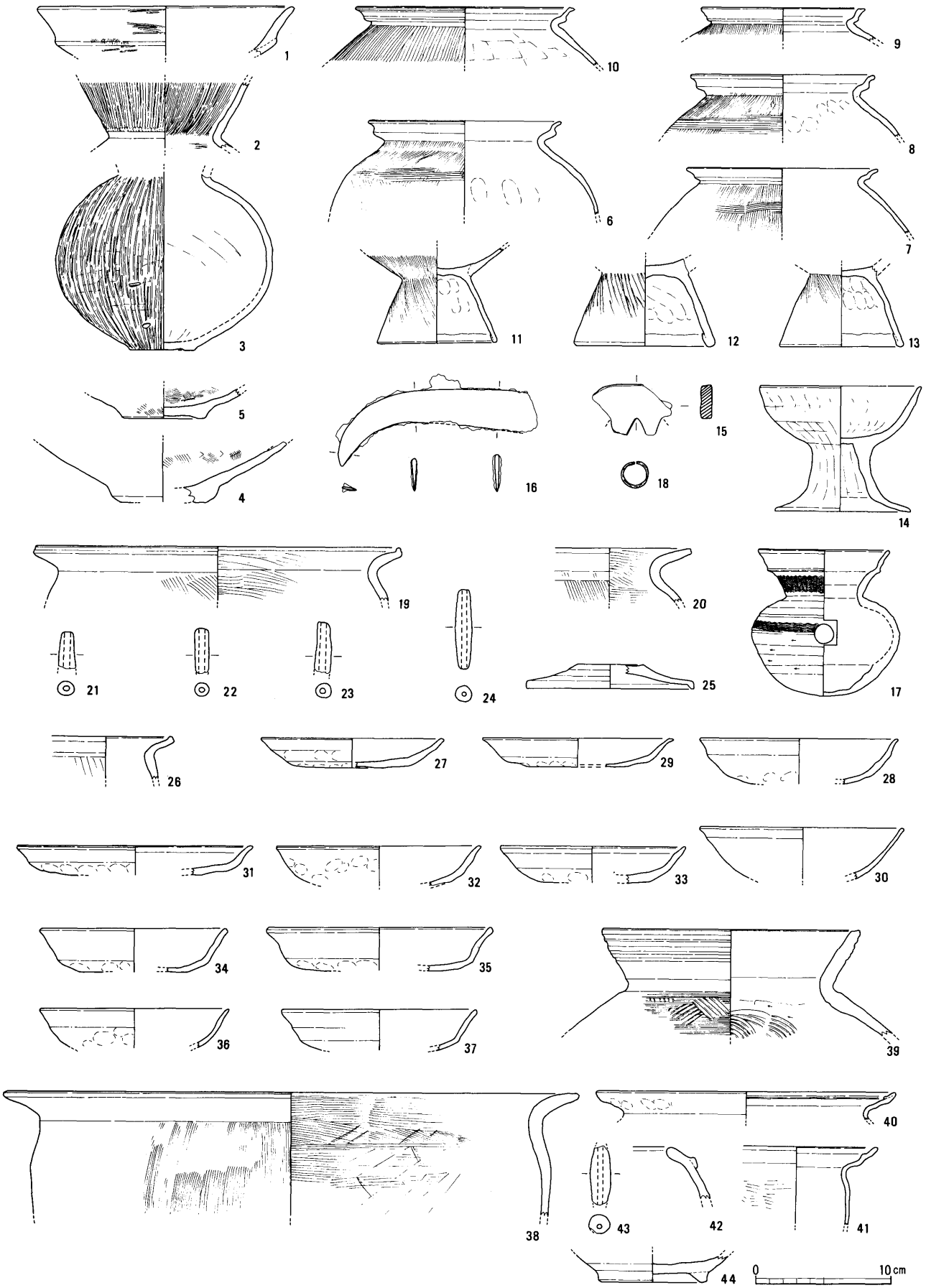
**中世の建物遺構から**

前年度の中の坊遺跡の調査では、井戸が4基検出されている[4]。当遺跡も同様、石組みの井戸の検出をはじめ、建物跡を検出したが集落としては小規模だった。横地高畑遺跡も同様、規模的には小さく、調査区の南東部に偏っていたと考えられる。　なお、平成8年に実施した漕代地区の試掘調査の段階では、主だった遺構は確認されなかったが、古轡A遺跡から土師器甕・土師器杯、目田山遺跡からは山皿、大正寺遺跡からは山茶椀等が出土しており、周辺の周知の遺跡でも古代から中世にかけての人々の生活の足跡が確認できた。

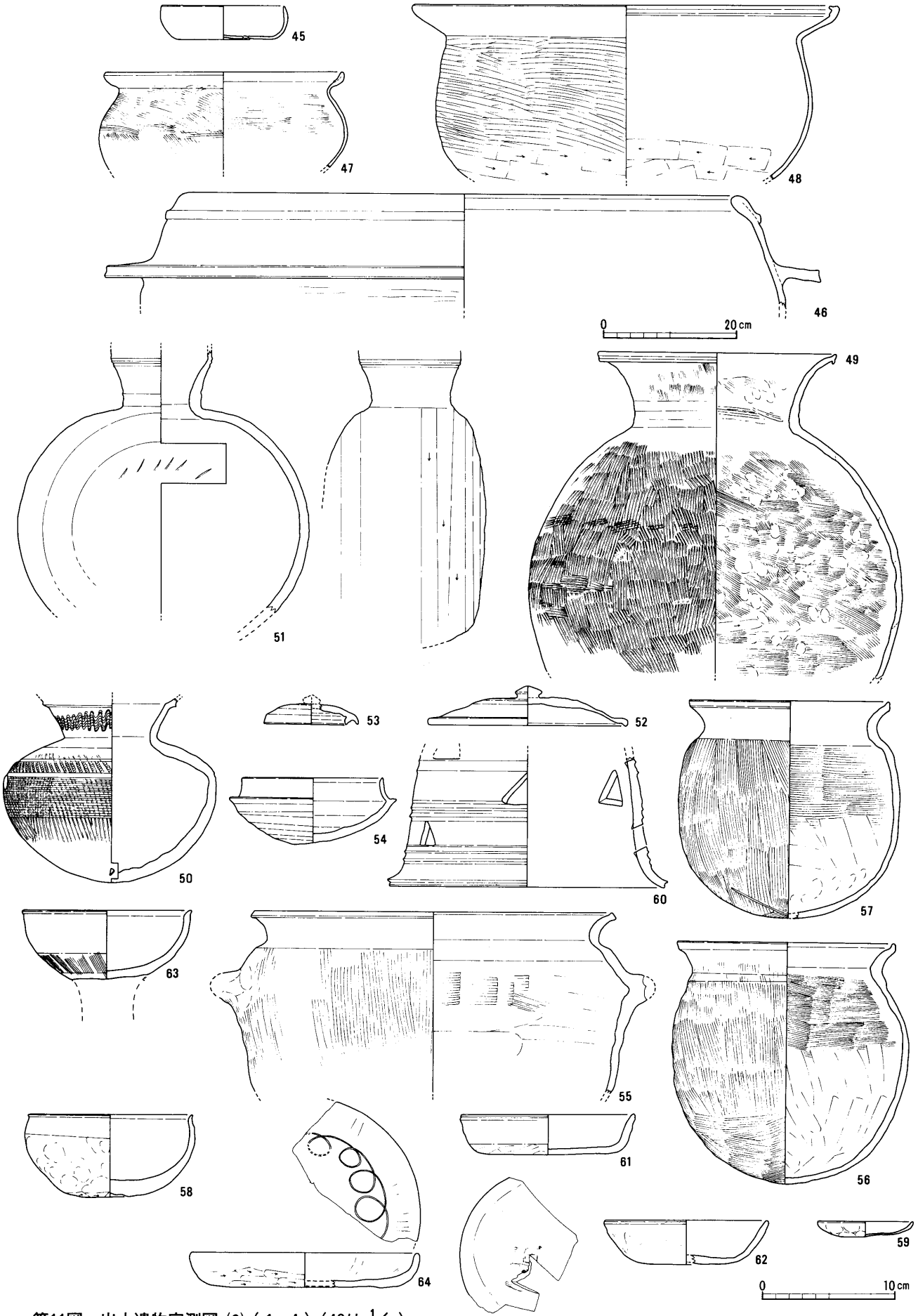
(中川　明)

［註］

7 「三重県斎宮跡調査事務所年報」1984年
『史跡斎宮跡発掘調査概報』三重県教育委員会・三重県斎宮跡調査事務所　昭和60年
8 藤澤良祐「山茶椀と中世集落」『尾呂』　瀬戸市教育委員会　1990年
藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号　三重県埋蔵文化財センター　1994年
9 伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie history』1　三重歴史文化研究会　1990年
10 新田洋『山添遺跡発掘調査報告』　三重県教育委員会　1979年
11 山田猛他「山城遺跡・北瀬古遺跡」　三重県埋蔵文化財センター　1994年
12 「陶邑Ⅰ」『大阪府文化財調査報告書』第33輯　大阪府教育委員会　1980年
13 「都城の土器集成」『古代の土器1』古代の土器研究会編　1992年
14 伊藤裕偉『多気遺跡群発掘調査報告』　三重県埋蔵文化財センター　1993年




第10図　出土遺物実測図 (1) ( 1 : 4 )



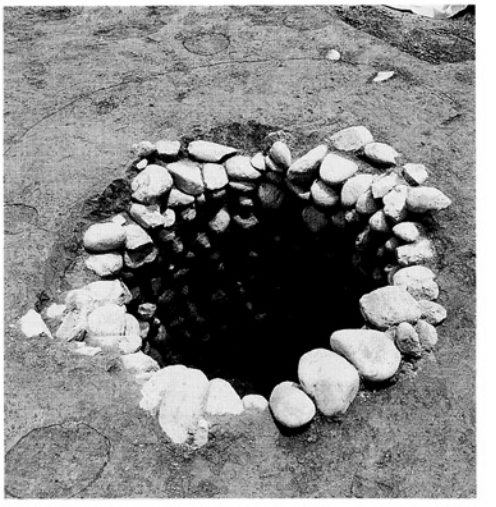

第11図　出土遺物実測図 (2) ( 1 : 4 ) (49は 1/8 )

| No. | 登録No | 器種 | 出土位置 遺構 | 法量 口径 | 法量 器高 | 調整・技法の特徴 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 残存度 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 019-01 | 古式土師器 壺 | C7 S X13 | 18.6 | | 外：ナデ後横方向ミガキ 指オサエ後ミガキ | 密 | やや不良 | 橙色 | 口縁部 1／6 | |
| 2 | 022-07 | 古式土師器 壺 | B10 S K35 | | | 内：縦方向ミガキ、ナデ 外：縦方向ミガキ、ナデ | やや密 | 並 | 橙色 | 頸部 1／2 | |
| 3 | 016-02 | 古式土師器 壺 | D12 S D44 | 16.0 | | 外：縦方向ミガキ、ケズリ | やや粗 | 並 | にぶい黄橙色 | 体～底部 | 体中央部に黒斑、穿孔あり |
| 4 | 032-06 | 土師器壺 | C12 S D44 | 6.2 | | 内：ヨコハケメ 外：一部ナデ、磨滅激しい | やや密 | 並 | 淡灰色 | 底部 1／3 | |
| 5 | 032-05 | 土師器壺 | C12 S D44 | 5.7 | | 内：斜行ハケメ 外：斜行ハケメ、ナデ | やや粗 | 並 | にぶい橙色 | 底部 完存 | |
| 6 | 011-03 | 土師器甕 | D13 S D44 | 13.9 | | 内：ナデ 外：ヨコナデ、ヨコハケメ | やや粗 | 並 | にぶい橙色 | 1／5 | |
| 7 | 010-06 | 土師器甕 | D12 S D44 | 14.0 | | 内：ナデ 外：ヨコナデ、縦方向ハケメ | やや粗 | 並 | 灰白色 | 1／9 | |
| 8 | 033-01 | 土師器甕 | C12 S D44 | 13.4 | | 内：ヨコナデ 外：ヨコナデ、縦横方向ハケメ | やや粗 | 並 | 明灰褐色 | 頸部 1／6 | |
| 9 | 018-01 | 土師器甕 | D11 S D44 | 12.0 | | 内：ヨコナデ 外：ヨコナデ、縦方向ハケメ | やや粗 | 並 | 灰褐色 | 口縁部 1／5 | 口縁部煤付着 |
| 10 | 034-01 | 土師器甕 | C12 S D44 | 15.5 | | 内：ヨコナデ 外：ヨコナデ、縦方向ハケメ | やや粗 | 並 | 淡橙色 | 口縁部 1／2 | |
| 11 | 010-04 | 土師器甕 脚部 | B11 S D44 | 8.6 | | 内：ナデ、折返し 外：脚下半部までのハケメ | やや粗 | 並 | 灰白色 | 脚部 完存 | |
| 12 | 021-02 | 土師器甕 脚部 | B12 S D44 | 10.0 | | 内：オサエ後ナデ、折返し 外：脚下半部までのハケメ | 粗 | 並 | 浅黄橙色 | 脚部 完存 | |
| 13 | 010-05 | 土師器甕 脚部 | B12 S D44 | 8.8 | | 内：オサエ、折返し 外：脚上半部までのハケメ | やや粗 | 並 | 灰白色 | 脚部 完存 | |
| 14 | 025-02 | 土師器高杯 | F7 S X13 | 11.7 | 10.0 | 内：ヨコナデ 外：ヨコナデ、上積み痕アリ | やや密 | 並 | 浅黄橙色 | 完形 | |
| 15 | 013-07 | 土製品 | D12 S D44 | 長 5.8 幅 3.7 | 厚 0.8 | 表裏：ナデ、朱彩 | やや密 | 並 | 赤色 | | 獣形か |
| 16 | 046-03 | 鉄鏃 | C7 S X13 | 20.0 | 3.0 | 表裏面ともに腐食激しい | — | — | — | ほぼ完存 | |
| 17 | 008-02 | 須恵器甕 | D4 S D12 | 9.6 | 10.8 | 内：ヨコナデ 外：ヨコナデ、ヘラケズリ、波状文 | 粗 | 良 | オリーブ黒色 | 口縁部 1／3 欠 | |
| 18 | 046-02 | 耳環 | D4 S D12 | 1.9 | 0.15 | 面取り調整（6面） | — | — | — | 完存 | |
| 19 | 026-01 | 土師器甕 | B4 S H19 | 26.5 | | 内：斜行ハケメ 外：ヨコナデ、ハケメ | やや密 | 並 | 浅黄橙色 | 1／8 | |
| 20 | 026-04 | 土師器甕 | B5 S H19 | | | 内：ヨコハケメ 外：ヨコナデ、ハケメ | やや密 含微砂粒 | 並 | 浅黄橙色 | 小片 | |
| 21 | 020-07 | 土師質土錘 | D4 S H19 | 外径 1.3 | 残長 2.75 | 外：ナデ | やや密 | 並 | 灰白色 | | |
| 22 | 020-08 | 土師質土錘 | B5 S H19 | 外径 1.0 | 残長 3.35 | 外：ナデ | やや密 | 並 | 浅黄橙色 | | |
| 23 | 020-09 | 土師質土錘 | B5 S H19 | 外径 1.2 | 残長 3.8 | 外：ナデ | やや密 | 並 | にぶい黄橙色 | | |
| 24 | 028-11 | 土師質土錘 | B4 S H19 | 外径 1.2 | 長 5.85 | 外：ナデ | やや密 | 並 | 褐灰色 | 完存 | |
| 25 | 013-03 | 須恵器杯蓋 | B5 S H19 | 12.0 | 1.8 | 内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、ロクロケズリ | やや密 | 良 | 灰色 | | |
| 26 | 002-03 | 土師器甕 | C7 S K14 | | | 内：ナデ 外：ヨコナデ、斜行ハケメ | やや密 | 並 | 浅黄橙色 | | |
| 27 | 012-04 | 土師器杯 | C7 S K14 | 13.4 | 2.2 | 内：ナデ 外：ヨコナデ、オサエ後ナデ | やや密 | 並 | 橙色 | 1／5 | |
| 28 | 001-04 | 土師器杯 | C7 S K14 | 14.5 | | 内：ナデ 外：ヨコナデ、オサエ後ナデ | やや密 | 並 | にぶい橙色 | 1／8 | 口縁端部は外反 |
| 29 | 001-03 | 土師器杯 | C7 S K14 | 14.0 | | 内：ナデ 外：ヨコナデ、オサエ後ナデ | やや密 | 並 | にぶい橙色 | 1／6 | 口縁端部は外反 |
| 30 | 022-01 | 灰釉陶器椀 | C7 S K14 | 15.0 | | 内：ロクロナデ 外：ロクロナデ | 密 | 並 | 灰白色 | 1／4 | |
| 31 | 020-05 | 土師器杯 | B10 S D34 | 17.1 | | 内：ナデ 外：ヨコナデ、オサエ後ナデ | 密 | 並 | 橙色 | | |
| 32 | 020-06 | 土師器杯 | B10 S D34 | 14.9 | | 内：ナデ 外：ヨコナデ、オサエ後ナデ | 密 | 並 | 橙色 | 1／3 | |
| 33 | 020-02 | 土師器杯 | B9 S D34 | 13.4 | | 内：ナデ 外：ヨコナデ、オサエ後ナデ | 密 | 並 | 橙色 | 1／6 | |
| 34 | 020-04 | 土師器杯 | B10 S D34 | 13.7 | | 内：ナデ 外：ヨコナデ、オサエ後ナデ | やや密 | 並 | 橙色 | 1／8 | |
| 35 | 020-03 | 土師器杯 | B10 S D34 | 16.2 | | 内：ナデ 外：ヨコナデ、オサエ後ナデ | 密 | 並 | 橙色 | 1／8 | |
| 36 | 033-05 | 土師器杯 | B10 S D34 | 13.8 | | 内：ナデ 外：ヨコナデ、オサエ後ナデ | やや密 | 並 | 橙色 | 1／6 | |
| 37 | 033-04 | 土師器杯 | B10 S D34 | 14.2 | | 内：ナデ 外：ヨコナデ | やや密 | 並 | 橙色 | 1／6 | |
| 38 | 031-01 | 土師器甕 | B10 S D34 | 42.4 | | 内：ハケメ、ケズリ 外：ヨコナデ、ハケメ | やや粗 | 並 | 浅黄橙 | 1／12 | |
| 39 | 031-02 | 須恵器甕 | B10 S D34 | 19.0 | | 内：ロクロナデ、タタキメ 外：ロクロナデ、カキメ後タタキ | やや密 | 並 | 灰白色 | 1／10 | |
| 40 | 033-02 | 土師器鍋 | F10 S E33 | 22.0 | | 内：ヨコナデ 外：ヨコナデ、 | やや粗 | 並 | 灰白色 | 1／10 | |
| 41 | 017-03 | 土師器鍋 | F10 S E33 | | | 内：ヨコナデ 外：ヨコナデ、ハケメ | やや粗 | 並 | 浅黄橙色 | 小片 | 外面に煤付着 |
| 42 | 032-03 | 土師器羽釜 | K10 S E33 | | | 内：ナデ 外：ヨコナデ、ナデ | 粗 | 並 | 浅黄橙色 | 小片 | |
| 43 | 034-02 | 土師質土錘 | F10 S E33 | 残長 4.3 | 外径 1.6 | 外：ナデ | やや密 | 並 | 浅黄橙色 | | |
| 44 | 032-02 | 陶器山茶椀 | K10 S E33 | 底径 7.2 | | 内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、高台貼付後ヨコナデ | やや密 | 良 | 灰白色 | | |
| 45 | 013-05 | 土師器皿 | C5 S K21 | 9.0 | 2.5 | 内：ナデ 外：ナデ、指オサエ | やや密 | 良 | 灰白色 | 完存 | |
| 46 | 011-01 | 土師器羽釜 | D5 S K21 | 42.0 | | 内：ナデ 外：ナデ | やや密 | 良 | 淡橙色 | | |
| 47 | 016-01 | 土師器鍋 | H7 S D17 | 18.0 | | 内：ヨコハケメ 外：ヨコナデ、斜行ハケメ | やや密 | 並 | 灰白色 | 3／4 | |
| 48 | 009-01 | 土師器鍋 | I7 S D17 | 31.3 | | 内：ナデ、底部ケズリ 外：ハケメ、底部ケズリ | やや密 | 並 | 浅黄橙色 | 1／2 | |
| 49 | 035-01 | 須恵器甕 | D14 P4 | 35.9 | | 内：ロクロナデ、斜行ハケメ 外：ナデ、横ナデ、タタキ | やや粗 | 並 | にぶい橙色 | | |
| 50 | 037-03 | 須恵器甕 | B15 P2 | 体部 16.2 | | 内：ロクロナデ 外：ロクロナデ ,タタキ 後カキメ,刺突文 | やや粗 | 並 | 灰白色 | 口縁端部欠損 | 底部穿孔あり |
| 51 | 038-01 | 須恵器提瓶 | I12 P1 | | | 内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、ロクロケズリ | やや粗 | 並 | 灰白色 | | |
| 52 | 015-01 | 須恵器杯蓋 | C3 P1 | 15.0 | 3.0 | 内：ロクロナデ 外：ロクロケズリ、ロクロナデ | 密 | 並 | 灰白色 | 完存 | 宝珠ツマミあり |
| 53 | 036-03 | 須恵器杯蓋 | D15 P1 | 7.0 | | 内：ロクロナデ 外：ロクロケズリ、ロクロナデ | やや粗 | 並 | 明青灰色 | 1／3 | 宝珠ツマミ欠損 |
| 54 | 013-01 | 須恵器杯身 | A9 P1 | 10.3 | 5.0 | 内：ロクロナデ 外：ロクロケズリ、ロクロナデ | やや密 | 良 | 灰色 | | |
| 55 | 024-01 | 土師器甕 | A7 P2 | 27.0 | | 内：ナデ 外：ヨコナデ、オサエ、縦ハケメ | やや密 | 並 | 浅黄橙色 | 底部欠 | 把手付 |
| 56 | 025-01 | 土師器甕 | C3 P4 | 16.1 | 18.2 | 内：ヨコナデ、ヨコハケメ、指オサエ、ヘラケズリ 外：ヨコナデ、縦・ヨコハケメ | やや密 | 並 | 浅黄橙色 | ほぼ完存 | |
| 57 | 045-01 | 土師器甕 | H12 P1 | 14.9 | 16.3 | 内：ヨコナデ、ヨコハケメ、指オサエ、ヘラケズリ 外：ヨコナデ、縦・ヨコハケメ | やや密 | 並 | 浅黄橙色 | 7／8 | |
| 58 | 036-05 | 土師器杯 | G14 P1 | 12.4 | 6.2 | 内：ナデ 外：ヨコナデ、指オサエ、ヘラケズリ | やや粗 | 並 | 橙色 | 完存 | 刻みあり |
| 59 | 044-05 | 土師器小皿 | D15 P5 | 7.15 | 1.2 | 内：ナデ 外：ナデ、指オサエ | やや密 | 並 | 淡黄色 | 3／4 | |
| 60 | 005-02 | 器台 | G6 包含層 | 底径 20.5 | | 内：ロクロナデ 外：ロクロナデ | やや密 | 良 | 灰色 | | 二等辺三角形の透しあり |
| 61 | 012-05 | 土師器杯 | C7 包含層 | 12.8 | 3.0 | 内：ナデ 外：ヨコナデ、ヘラケズリ | やや密 | 並 | 橙色 | | かぜがまえの墨書あり |
| 62 | 022-04 | 土師器杯 | E4 包含層 | 12.2 | 3.3 | 内：ナデ 外：ヨコナデ、ナデ | やや密 | 並 | 浅黄橙色 | 1／4 | 波状の墨書 |
| 63 | 041-03 | 土師器高杯 | I11 包含層 | 12.5 | 5.2 | 内：ナデ 外：下半部ハケメ | やや密 | 並 | 浅黄橙色 | | |
| 64 | 043-04 | 土師器皿 | B12 包含層 | 17.0 | 2.6 | 内：ナデ 外：ヨコナデ、ヘラケズリ | やや密 | 並 | 浅黄橙色 | 1／4 | 螺旋文あり |

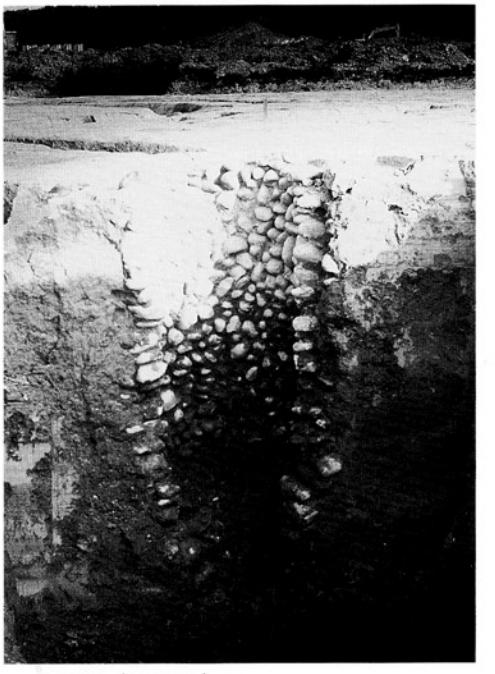
**第1表　出土遺物観察表**

Ａ地区全景（西から）

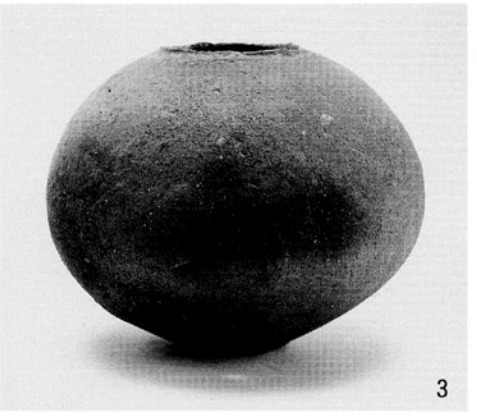
ＳＸ13（西から）

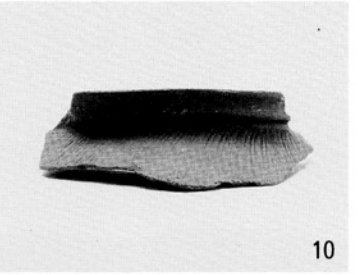


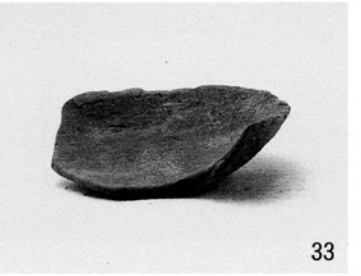
ＳＨ19（西から）

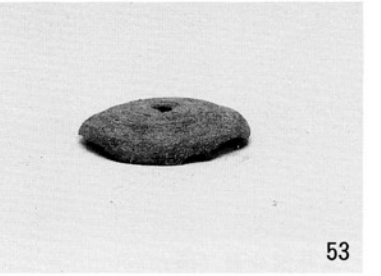


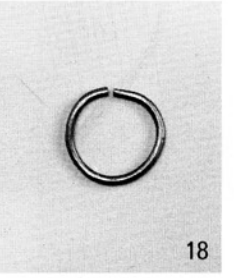
ＳＥ33（西から）

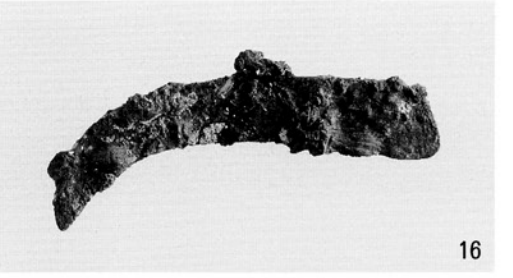


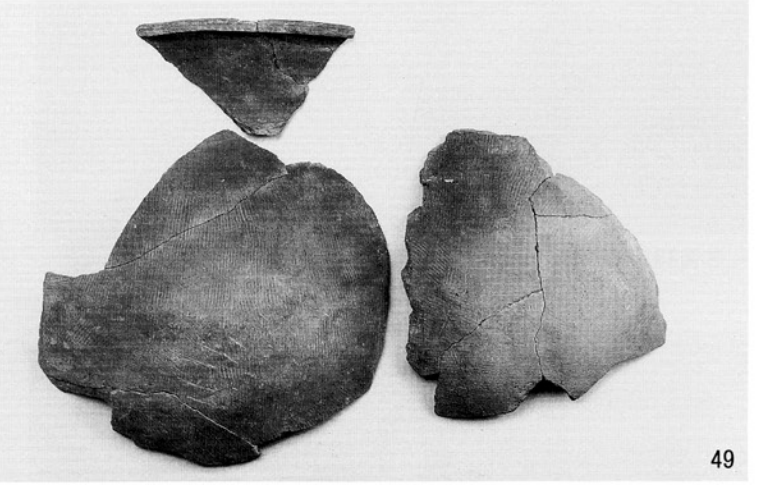



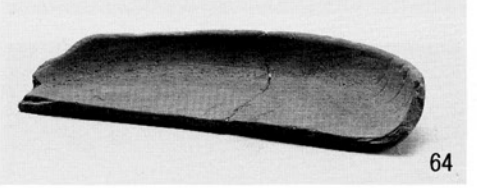


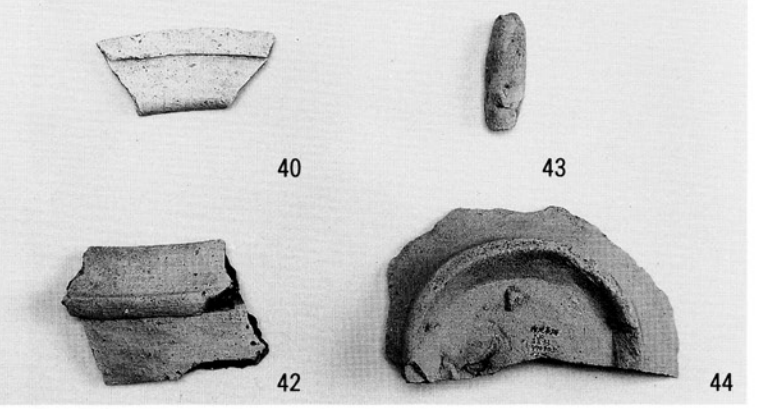










出土遺物（15・18は $\frac{2}{3}$ 、49は $\frac{1}{20}$ 、他は $\frac{1}{3}$ ）

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | よこち たかばたけいせきはっくつちょうさほうこく |
| 書名 | 横地高畑遺跡発掘調査報告 |
| 副書名 | |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 三重県埋蔵文化財調査報告 |
| シリーズ番号 | 167 |
| 編著者名 | 中川 明・津田琢麻 |
| 編集機関 | 三重県埋蔵文化財センター |
| 所在地 | 〒515－0325 三重県多気郡明和町竹川503番地 TEL 0596-52-1732 |
| 発行年月日 | 西暦 1998年 3月 31日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯<br>°′″ | 東経<br>°′″ | 調査期間 | 調査面積<br>m² | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| よこちたかばたけいせき<br>横地高畑遺跡 | まつさかしよこちちょう<br>松阪市横地町<br>あざたかばたけ<br>字高畑 | 24204 | 351 | 34°<br>31′<br>38″ | 136°<br>35′<br>14″ | 1997.5.6～<br>1997.9.9 | 1,700m² | 平成9年度県営ほ場整備事業（漕代地区） |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 横地高畑遺跡 | 集落跡 | 古墳時代<br><br><br>奈良時代<br><br>室町時代 | 方墳 1基<br>溝 1条<br><br>竪穴住居 1棟<br><br>掘立柱建物 2棟<br>井戸 1基<br>溝 1条 | 土師器高杯、S字甕、壺、土製品（朱付着）須恵器瑕<br>土師器甕、皿、鍋<br>墨書土器<br>耳環<br>鉄鎌 | 土製品は獣形の可能性がある |

平成10(1998)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年8月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 167

**横地高畑遺跡発掘調査報告**

－松阪市横地町－

1998年3月

編集
発行 三重県埋蔵文化財センター

印刷 光出版印刷株式会社